

日本酒で乾杯推進会議レポート

平成28年度「100人委員会」開く



「日本酒で乾杯運動」のVIP応援団が学習&意見交換の会(11回目) 元文化庁長官の近藤誠一氏が「文化の価値の継承」をテーマに講演

平成28年度の「100人委員会」(石毛直道代表)が、5月9日の午後、東京港区元赤坂の明治記念館で開催されました。11回目となる今回は、多忙な日程の合間を縫って16人の委員が参加。100人委員で近藤文化・外交研究所代表の近藤誠一氏による講演「ユネスコと世界遺産・無形文化遺産～文化の価値の継承」を聴講したほか、「乾杯推進運動」の取り組み方などを巡って意見交換を行いました。また、会議終了後に開かれた恒例の「日本酒文化を味わう会」では、運動のさらなる発展を祈って懇親のひとときを過ごしました。



近藤誠一氏



全国の日本酒と料理を楽しみながら、懇親の宴



「日本酒文化を味わう会」のオープニング。石毛代表の発声に合わせて「日本酒で乾杯！」

出席者の顔ぶれ

(50音順)



飯田 永介氏
日本名門酒会本部長



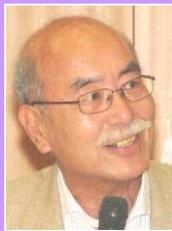
石川 雄章氏
(公財)日本醸造協会
顧問



石毛 直道氏
国立民族学博物館
名誉教授



神崎 宣武氏
民俗学者



北本 勝ひこ氏
東京大学名誉教授



木村 修一氏
東北大学名誉教授



兒玉 徹氏
東京大学名誉教授
日本醸造学会会長



こばた てるみ氏
スポーツ栄養士
日本酒スタイリスト



近藤 誠一氏
近藤文化・外交研究所
代表



篠原 成行氏
日本酒造組合中央会
会長



島田 律子氏
タレント・エッセイスト
日本酒スタイリスト



滝澤 行雄氏
秋田大学名誉教授



谷本 亙氏
まち&むら研究所代表



手島 麻記子氏
テーブルコーディネーター
日本酒スタイリスト



山本 祥一朗氏
評論家



野村 万蔵氏
狂言師
野村万蔵家当主



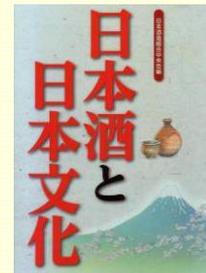
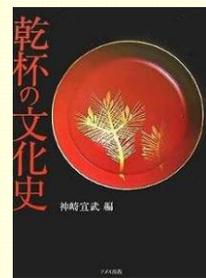
各界の有志が結集した100人委員会。乾杯運動の発展へ多彩な支援活動



平成16年6月、日本酒で乾杯推進会議を中核として第一歩を踏み出した「日本酒で乾杯運動」。乾杯の普及、定着を通じて「日本文化と日本酒文化のルネサンス」をめざす業界総力のカルチャー・ムーブメントは、スタートから12年を経て、ますます意気盛ん。全国の自治体で「乾杯条例」の制定が進む一方、昨年の10月1日（日本酒の日）に行われた「全国一斉 日本酒で乾杯！」は、初の試みにもかかわらず、国内外の4万7千人が参加するという大きな成功を収めました。

□ 新たに女優の田中美里さんら3氏が就任。現在の委員数は93名

100人委員会は、学術、文化、スポーツなど各界の有志が結集した乾杯運動の中核組織で、平成18年の発足以来、単行本『乾杯の文化史』の編纂・発行と冊子『日本酒と日本文化』の制作協力、推進会議HPへのコラム寄稿など、多彩な活動を繰り広げてきました。委員数は現在93名。今年度に入り、飯田永介氏（日本名門酒会本部長）、田中美里氏（女優）、山本樹育氏（〔公社〕日本青年会議所会頭）の3氏が新たに委員に就任しています。今回の会合には、石毛代表ら主なメンバーのほか、推進会議の西村運営委員長、日本酒造組合中央会の篠原会長らが出席。講演聴講と意見交換、懇親の宴などを通じて、支援活動への意思を新たにしました。



● 『お酒は18歳から』が世界の常識。日本も見直すべきでは？（石毛代表の挨拶）



石毛代表

開会の挨拶を行った石毛代表は、「今年から18歳の青年にも選挙権が与えられたが、飲酒は未だに20歳まで認められない。宗教で飲酒が禁じられているイスラム圏、21歳で解禁となるアメリカを除き、世界の体制は『お酒は18歳から』がスタンダードになっている」とした上で、「日本も、大正時代に作られた未成年者飲酒防止法を見直して、18歳からお酒が飲めるようにすべきではないかと個人的には思っている」との考えを示しました。



西村運営委員長

続いて、西村運営委員長が「日本酒で乾杯推進会議」の活動状況（会議の会員数3万8344人、乾杯条例の制定状況計122件、うち日本酒関係99件）と28年度事業計画の概要を説明。事業計画については、総会・フォーラム＆パーティの開催と全国一斉乾杯の実施（10月1日、明治記念館）、地方大会の開催（10月7日、広島市）などのほか、会員数の拡大について「会員数は順調に伸びてきたが、このところのやや伸び悩みも見られる。ぜひ頑張って5万人まで拡大したい」と述べました。



「日本の心を伝えるために、ユネスコ文化遺産登録は有効」(近藤氏)

近藤誠一氏の講演「ユネスコと世界遺産・無形文化遺産～文化の価値の継承」は、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使など外交官として豊富な経歴を有する近藤氏が、ご自身の体験を踏まえて、伝統文化の重要性和、それを世界そして次代に伝えていくことの意義を訴えたもの。

近藤氏は、ユネスコの役割と文化遺産の保護体制などに触れた中で、「現在ユネスコには、日本に関して 19 件の世界文化遺産、22 件の無形文化遺産、3 件の記憶遺産が登録されているが、これはいずれも日本文化の精神(自然観、死生観、平和思想など)が評価されたもので、日本酒を含む和食の無形文化遺産登録も、また私の最後の仕事となった富士山の世界文化遺産登録も、食や自然に対する日本人の感性が認められた結果だ」と説明。その上で、

「文化は分かりやすく伝えにくいものだが、伝える努力を積み重ねることで理解される。今は和食ブームだが、単に和食のおいしさだけでなく、生き物の大事な命をいただくといった日本人の自然観、精神性まで伝わるようにならないといけない。時間はかかるが、日本人の心を世界に伝える手段として、ユネスコは非常に有効だと思う」と、世界遺産登録の意義を強調しました。



近藤誠一氏プロフィール

1946 年神奈川県生まれ。東京大学教養学部卒。同大学大学院法学政治学研究科を中退し、1972 年外務省入省。在米大使館公使、経済局審議官、OECD 事務次長、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使などを経て、2010 年～2013 年まで文化庁長官。退官後は、東大特任教授、東京都交響楽団理事長などを務めた。仏レジオン・ドヌール・シュバリエ章、デンマーク・タネブロー勲章大十字章など受章。『世界に伝える 日本心』(星槎大学出版会)、『外交官のア・ラ・カルト』(かまくら春秋社)など、著作も多い。

酒文化と乾杯の意味、今後の運動の進め方などを巡り意見交換



南部運営委員

続いて行われた意見交換(司会は運営委員会の南部隆保委員)では、近藤氏の講演を受けて、まず日本の酒文化と乾杯の意味などを巡って議論がスタート。「日本で乾杯するようになったのは明治以降で、神様に捧げた後にそのお酒をいただくというのが日本古来の文化だ」(南部委員)、「欧米でもお酒や食事は本来神に捧げるもので、乾杯にも様々な形、言葉があるが、原点は日本と共通していると思う」(近藤氏)、「日本では酒造りそのものが神の技。そうした日本文化を繋いでいくという意味でも乾杯運動を広げていかなければならない」(神崎宣武氏)、「狂言の世界でも酒は欠かせない。酒を飲む演技は狂言役者にとって遣り甲斐のある奥の深いものだ」(野村万蔵氏)などのやり取りが交わされました。

一方、今後の運動の進め方では、「わかりやすい言葉で運動の概念を伝えることが大事。流通業界など多くの人を巻き込んでいくことで運動が広がっていく」(飯田永介氏)、「SNS などを使って料飲店や若者たちに乾杯の意義を伝えていく」(南部委員)、「鉄道の車輛を貸し切ってお酒を楽しむイベントが各地で好評だ。ツーリズムにもっとお酒を絡めるべきでは?」(谷本互氏)、「広告業界や大学で若者に醸造や発酵の面白さを伝える新しい動きが出ている。こういう動きとの連携も運動のプラスになると思う」(北本勝彦氏)などの意見が出されました。



篠原会長

会議の最後には中央会を代表して篠原会長が挨拶。「地域の食文化が旅行者や地元の人々に感動を与える。近藤先生のお話を伺って、これこそが、これからの日本酒業界がやっていかなければならないことだと思った」と述べて、今後の運動への決意を示しました。

 全国各地の日本酒と和洋の美味を囲んで「日本酒文化を味わう会」



100人委員会の終了後は、恒例「日本酒文化を味わう会」のスタート。参加者は、石毛代表の発声で「日本酒で乾杯！」した後(1頁)、全国各地の日本酒 24 銘柄と和洋の豪華料理を囲んで、和やかな歓談のひとつときを楽しみました。途中、今年の春の叙勲で石毛代表が瑞宝中綬章を受章したことが報告されると、会場からは盛んな拍手が。同代表も「私はこの道一筋という言葉が嫌い。楽しいから研究しているだけで、どんどん面白いことをやっていきたい」と返礼のスピーチを行って、参加者の祝福に応えました。



石毛代表の叙勲は、乾杯運動にとっても何よりの朗報



最後は、石毛代表の叙勲を称えて、再び日本酒で乾杯！